

# キリスト信仰と英米文学—人生の讃歌（II）

—Voices of the Night における Henry

Wadsworth Longfellow の心（訳と解釈）—

森 谷 峰 雄

も く じ

は し が き

1. 「夜の讃歌」 (“The Psalm of Night”)
2. 「人生の讃歌」 (“The Psalm of Life”)
3. 「刈り手と花」 (“The Reaper and the Flowers”)
4. 「星の光」 (“The Light of Stars”)

あ と が き

は し が き

本稿はロングフェローの実際のこの世とのかかわりを彼の人生の歌一詩を通して、探ろうとしているのである。そうして理解できたことは彼は徹底して、イエズスの僕であったということである。キリストスにあって生きることが彼のこの世に於ける最大の目的であったことは明白である。そもそも彼の詩の発表はキリスト教の真理に仕えることであった。C. S. Lewis はこれが故に、彼の詩を喜んだのであり、筆者も同様にここにこの詩人に無限の憧れを抱くのである。学問とは、文化とは、その発生において、かかる純粹の心の迷いと軌を同一にしている。そうでない文化は人の心を生ける真の神から引き離し、地獄の集まりを構成する。そのような群れがミルトンが『パラダイス・ロスト』で歌っているパンデモニウムなのであり、神の叛逆徒である。かかる世に抗してロングフェローは詩文において信仰の闘いを闘ったのである。

## 1. 「夜の讃歌」 (“Hymn to the Night”)

「この詩は1839年の夏に、自分の居間の窓に坐っているときに書かれた。それはその年の最も馨よい夜であった。私はその時間と光景の印象を再現しようとした」とある。

静かな夜にロングフェローは一体どんな詩想を得たのだろうか。心澄む静かな夜に天国を思うその心は何と慕わしく思われることだろうか。ミレーにまれ、ミルトンにまれ、エミリー・ディキンソンにまれ、夕暮の趣き平和な一日の終りの安らぎと、安堵の心が織り成して、麗し

い天国への憧れが生れて来よう。<sup>43</sup>しかし、ロングフェローはこの世に幻想を抱いていた詩人ではなかった。彼はこの世の悪をよく知っていた。この世の悲しみ、楽しみを知っていた。夜の部屋には多くの悲しみや喜びの音がひびいていたのであった。この喜怒哀楽の人生にいて、人の心は疲れる。夜は休息の源であった。

I

I HEARD the trailing garments of the Nights

Sweep through her marble halls!

I saw her sable skirts all fringed with light

From the celestial walls!

(夜の衣裳の絹ずれの音が聞えてきた  
大理石の堂をさっと通り過ぎて！  
その黒いスカートが天の壁から放射する  
光に縁取られていた。)

II

I felt her presence, by its spell of might,

Stoop o'er me from above;

The calm, majestic presence of the Night,

As of the one I love.

(「夜」を感じる、その魅力により  
空から私を包み込むのを。  
私の愛しい者のような、静かで  
厳かな姿を。)

III

I heard the sound of sorrow and delight

The manifold, soft chimes,

That fill the haunted chambers of the Night,

Like some old poet's rhymes.

(悲しみや喜びの音が聞える  
多様で、やさしい響きが。  
それは古えの詩人の押韻のように  
繰り返す「夜」の部屋に満ちる。)

Ⅳ

From the cool cisterns of the midnight air  
My spirit drank repose;  
The fountain of perpetual peace flows,—  
From those deep cisterns flows.

(真夜中の空気の涼しい貯水庫から  
私の霊は休息を飲む。  
永久の平和の泉が流れる  
この深い貯水庫から。)

Ⅴ

O holy Night! from thee I learn to hear  
What man has borne before!  
Thou layest thy finger on the lips of Care,  
And they complain no more.

(おう、聖なる「夜」よ！ 汝から私は聞こう  
人間が以前に耐えたことどもを！  
汝が汝の指を心配の唇に置けば  
唇はもう不平をいわない。)

Ⅵ

Peace! Peace! Orestes-like I breathe this prayer!  
Descend with broad-winged flight,  
The welcome, the thrice-prayed for, the most fair,  
The best-beloved Night!

(平和よ！ 平和よ！ オレステスのように、私はこの祈りをささやく！  
翼をひろく拡げて、飛んで降りてこよ。  
歓迎され、熱心に祈り求められ、最も麗しい、  
最も愛された「夜」よ！)

このロングフェローの詩を読んで、筆者自身の魂が彼の人格に同化されて、一個の清い魂となり、聖霊の恵みを受けた人として、生れたような気がする。感涙に溢れると言っても決して過言ではない。この苦しみと絶望の多い人生に、独りじっと耐えている人がいる、その魂の清い人が。そのことだけでも、筆者の心は大いに慰められる。ロングフェローの静かな、内面に沈着した平和な心を読むことが出来る。

このような平和な心は一体どこから生じたのであろうか。本当に心の澄んだ清らかな、祝福に満ちた、敬虔なピューリタンの明るい心が見られる。いかなる生活があつてのことだろうか。しかし、我々は誤解してはならない。彼の心は幸福のみを覚えていたのではない。第一に詩人は耐えなければならなかった人生の不幸を耐えたのである。第二に、その基盤に立って、天からの祝福が加わり、彼特有の明るい楽天主思想が可能になったと思われる。

ロングフェローは夜を永遠の休息と考えている。夜が来ると、すべての悩みは止む。夜は彼にとって、苦しみからの解放の時でもある。そして、肉体の死するときも又、このようになるのだらう。我らの魂はすべての圧迫から解放される。この世の苦しみ、魂の圧制者、生きているときに覚えたすべての隷属状態から解放される。顕著なことは夜が来るのを祈っていることである。夜は一種の死である。眠りもそうである。しかし、彼は夜をこのように、解放であると考えている。従って、死についても同じように、それは解放と見ているのでなからうか。彼の心は死をも友とするほど純真で、真のクリスチャンであった。

## 2. 「人生の讃歌」(“A Psalm of Life”)

「この詩は1838年7月26日に作られた。ロングフェローはこの詩について、語っている。私はこの詩をしばらくの間原稿のままに持っていました。それを、誰にも見せなかった。この詩は、私が塞ぎから回復しつつあった時の私の内奥の心からの声であった。1838年10月の『ニッカーボッカーマガジン』に発表される前に、大学のゲーテ講座の教室の前で詩人自身が読んだ。その題名は、今はこの詩についてのみ使用されているが、もともと詩人の心の中では、総称的であった。彼は讃歌、死の讃歌、人生のもう一つの讃歌を書いたと時々述べている。だから、“psalmist”は詩人自身である。この詩が『ニッカーボッカーマガジン』に印刷されたとき、クラッシュのモットーが載せられていた。

Life that shall send  
A challenge to its end,  
And when it comes say, Welcome, friend.

(挑戦をその終りに  
送るであろう人生は  
それが来るとき、「ようこそ、友よ」と言う)。<sup>10</sup>

このクラッシュからの引用によって、ロングフェローの思想の根底を知ることができる。クラッシュは死を友としている。ロングフェローも我々の最後の死を友としている。彼の魂は極めて真面目で、常に死を見詰めていただけでなく、それを友としていた。聖フランシスの思想、死も苦しみもすべて「友」であった。神にあるもの、それもすべて友であった。<sup>11</sup>

詩は次のようになっている。原文を引用し、訳を施し、解釈していきたい。

I

Tell me not, in mournful numbers,  
Life is but an empty dream!—  
For the soul is dead that slumbers,  
And things are not what they seem.

(悲しい調べで、私に告げるな  
人生は空しい夢に過ぎないと！—  
眠る魂は死んでいるのであって  
実相は外観と違う。)

理想を持ち、現実の改革に取り組んでいる善人はこの世に残す仕事が空しいことを知っていた。しかし、死を越えているから、彼は人生の全てを支配することができたのである。人生の肯定は死を肯定するところから始まっている。ここに、真の楽天主義がある。

この詩の副題は、“What the heart of the young man said to the Psalmist”である。Psalmist は詩人自身であると解説にある。“Tell me”の“me”は“the young man”である。これはロングフェロー以外の人物のように思えるが、実際は彼の“inmost heart”神の御旨を悟る心であろう。The Psalmist は現実に生き、悩み、苦しんでいる現実のロングフェローである。つまり、悟性に達したロングフェローが現実の矛盾に悩んでいる同じロングフェローに語り、諭す形式が取られている。

第一連。“Me”は悟性の内奥にある、詩人の魂である。“Tell”の主語はやはり、“me”と同じ作者である。相手は同じく現実の矛盾に悩んでいるロングフェロー自身の心である。何故、詩人は世が空しいと考え、物事を表向きのままに捕えたのだろうか。好運に恵まれ、いわゆる幸福の唯中にあると思われたロングフェローともあろう程の者にも、他人に言えない社会上の、個人的利益関係の何らかの件に不利益を感じられたのであろう。だから、人生は空しいと考えたのであろう。しかし、目に見える成功失敗、利益不利益が本質的な勝敗を決めるのではない<sup>09</sup>。だから、“things are not what they seem”と慰めているのだらう。眠る魂は死んでいるとは、永遠の国を思わず、理想のことを考えず、自分の歩むべき正しい方向を考えないで、又、信仰を持たず、神の御子を知らない魂のことを言うのである。このような魂は、肉体が生きていても、神の目から見ると、死んでいるのである。だから、聖書に「生き返らせた」とあるのは、肉的蘇生と同時に、霊的蘇生即ち、生きておられる主の魂に触れることを意味するのである<sup>09</sup>。そうでない魂は既に死んでいる、と言うのである。いかに社会的に見映えがなくても、お前は真理に目覚め、霊的に生きているのだから、お前の方が優れている。眠っている魂で、この世にのさばっていても何の得るところはない。死んだ魂で名誉や地位を得たとしても、それは聖書のたとえにあるように、愚かなことである<sup>09</sup>。一時的な、表面的な成功によって、真の価値を無と考えるてはならない。というのは、人生は、そのような、浮草のような、

表面的なものでなくて、永遠性を、永世を願うその一途な道にあるからである。故に、自分の為すことがすべてうまくいかず、この世をはかなむ余り、この世を生きるに価値なきものと考えてはならない。それは唯物主義への敗北である、と自ら論ず。

II

Life is real! Life is earnest!  
And the grave is not its goal;  
Dust thou art, to dust returnest,  
Was not spoken of the soul.

(人生は真実なり! 人生は真面目なり!)

そして、墓はその目標ではない。  
汝塵なれば、塵に帰るべし、とは  
魂に語られたものではない。)

主の贖罪を信じる者は罪を許されて、永遠に生きる。だから、罪を許された魂は清らかにして、神の御国を受け継ぐことになる。このように、真面目に生きている者はその魂に救いを受ける。心は永生を持つ。人間の魂は普遍性を持ち、天なる国に馳せ参じることになるであろう。人生を真面目に生きても、真実に生きても人は結局、死ぬと何一つ持たず、自分の体の灰のまま留まる。それこそ、本来の我らの姿なのである。我らの身体は我らの意思とは別個に生きる、別の生命である。むしろ、人間としての意識はそのような命を得体の知れない不気味なものとして感じる。我らが死に、体が自然の一部となるとき、初めて、私のこの体は自然の一部であるということが新しく感じられる。まことに、人の体はこの世の諸元素になる。しかし、生物にして下さったという意識が強くなる。人は謙遜に土から造られたこと、又、生きている意味を悟れば、誠に幸いであろう。しかし、前連で歌われたような生きかたをしてきた人間は、墓が人生の目標でなくて、ひとつの前進である、と悟る。生命はいつまでも生命として残る。ただ、天上で救われているか、否かが問題となるのである。

III

Not enjoyment, and not sorrow,  
Is our destined end or way;  
But to act, that each to-morrow  
Find us farther than to-day.

(我らに定められた目的は又は道は

喜びでも、悲しみでもない、

明日ごとに、今日よりは進歩するように

活動すること。)

神が喜ばれるのは、私どもの小さい成功ではない。むしろ、悲しみながらも、苦しみながらも、神の御旨に従って生きることである。そこでは、高度の祝福が支配するであろう。だから、常に、活動し、喜びにつけ、悲しみにつけ、絶えず、進歩すること。そして、より神に近付くことが我らの生きかたである。これを世俗的に解釈すると、原典の意味を誤ることになる。我らが何事につけ、信仰の道を、神に迫り近付く道におればそれでよいのである。喜びや悲しみを超越する倫理的厳しさが問われている。

精神的に向上することを、悟性のロングフェローは願っている。失敗成功はそれ自体問題ではない。ロングフェローはそれらを通して、精神的に、人格的に変質して、向上すること、これは彼自らの自由意志において、なすことができる。我々の人生の総決算において、問われているのは、この精神的向上、その達成、品性の向上であって、仕事そのものの大小は問われない。失敗すらも問題でない。ここに、ロングフェローの透徹した現世主義否定、来世主義肯定が見られると思うのである。もし、ここに、現世的利益を入れれば、彼の人間性を完全に失わせるのである。現世的利益の多寡が問題でなく、暗黒の逆境のただ中で、尚も、救い主を信じていることが大切なのである。信仰に生きる者は神にどれだけ与えるかが、問われるのである。

#### Ⅳ

Art is long, and Time is fleeting,  
And our hearts, though stout and brave,  
Still, like muffled drums, are beating  
Funeral marches to the grave.

(芸術は永く、光陰矢のごとし、  
我らの心臓は、頑丈で勇敢であるが、  
それでも、包まれた太鼓のように、  
墓に向かって、葬送曲を奏でている。)

人間の命の短さ、それに較べて、人類が到達した学芸の命の長さを思わざるを得ない。天国に通用する、学術を、現世において成したその人の魂は知恵となり、不滅の、祝福された霊となり、天上に復活体と共に、その楽しさをいつまでも味わう。真理を真理の故に愛し、それを求めた人の魂も祝福される。学芸を、自己の利益のために<sup>91</sup>行う者は、その業績がいかに優れていても、他生にては、面の表情のない人間となり、盲となる。

我らの心臓は、誠に、それが中止するまで、鳴りつづけている。その意味ではこの鼓動は葬送を奏でるのだ。そのことを思って、なお一層我らは知恵、真理に到達せんことを願う。ロングフェローはやはり、死をよくみつめ、そこから、出発し、死を超越した人であった。思想の

文学部論集

華を咲かせ、芸術を創造させ、その発端を、すべて神を愛する知恵より出発し、そしてそこに帰るべきである、と考えたのである。その意味において、芸術は永いという意味が我ら人間にとって、有効となるのである。

V

In the world's broad field of battle,  
In the bivouac of Life,  
Be not like dumb, driven cattle!  
Be a hero in the strife!

(世界の広い闘争場において  
人生の野営において  
黙り、追われる牛のようになるな  
闘争において、英雄となれ！)

人生の意味を知った私達、キリストの罪によって、罪を許され、天国に行くことができるようになった人類は、すべてを肯定的に見ることができる。だから、家の中に隠れていないで、外の戦闘場に趣く。

VI

Trust no Future, howe'er pleasant!  
Let the dead Past bury its dead!  
Act, — act in the living Present!  
Heart within, and God o'erhead!

(未来をあてにするな、いかに楽しくても！  
死んだ過去にその死体を埋葬させよ！  
活動せよ—この生ける現在に！  
愛を心に、神を頭上に！)

人間存在、社会その他すべて安定ということはない。<sup>(21)</sup>ルカ伝のイエスの御言葉にあるように、倉に穀物を一杯貯えた者が、その夜死んだ。魂に宝を貯えない者は一番大切なものを無視していると言うのである。<sup>(22)</sup>その深刻さを知っているので、“Trust no future” というのである。他方、過去は過ぎ去って、無くなっている。木の葉を見ると、よく分かる。落葉した木の葉は、過去にたとえることができる。その葉が過去に生きている間は確かに、しっかり働いていた。しかし、落葉すれば、もはや、光合成はしない。肥料などになる以外用はない。その木の成長にとって、何の意味もない。だから、その木の葉にしがみつくな！ というのである。むしろ、今生きている木の葉——生きた信仰——に目を転じよ。この生きた葉今力となっ

て、木を養っている。この木の葉のように今、活動せよ。そこが、その時が、活動の場、時なのだ。

Ⅶ

Lives of great men all remind us

We can make our lives sublime,

And departing, leaves behind us

Footprints on the sands of time;

(偉大な人々の生涯はすべて、我らに気づかせる、

我らの人生を高尚にすることができる、と。

そして、この世を去れば、

時の砂浜に足跡を残す、と。)

過去の(もちろん、現代の)偉大な人々は、すべて、ロングフェローが上に述べてきたような人間である。特に、“Heart within, and God o'erhead”が彼らの精神構造である。このように生きてきた人々は、又我々の心の緒琴に触れ、振動させ、それによって、我々の体も活動を始める。彼らの師は神の御子、復活のイエス、メシアである。このような信条で、このように、生涯を送ってきた人々は、後世の同じような精神的パターンの人々に足跡を残すことになる。ロングフェローのみならず、ミルトンも、ワーズワースも、ホイットマンもすべて、神と共に歩んでいる人々は必然的にこのようになる。真理にあって暗黒の力にめげず、まっすぐに歩んでいる人々の姿は確かに天使のそれであり、天に覚えられている姿である。換言すれば、「命の書物」に名を記され、「白い石」を与えられた人々なのだ。

Ⅷ

Footprints, that perhaps another,

Sailing o'er life's solemn main,

A forlorn and shipwrecked brother,

Seeing, shall take heart again.

(また、人生の荘厳な海原を

一人で航海している者

孤独で、難破に出会った兄弟は、

その足跡を見て、再び勇気を取り戻さん。)

神を頭に、勇気を心に、真理に向かって、真面目に生きている人々は、この世の勢力に必ず難破してしまう。(究極の勝利は疑いなく、彼の上にあるけれども)、一時的に暴力とか、人々の姦計にその人の生活は破られるであろう。そうでなくても、厳しいこの世の営みは正義の名

において、動いているのである。その中、真理を正面切って進んでいる人々にどんな姦計が設けられるかも知れない。高度なサタンの狂い猛ける霊的精神的破壊力が襲いかかる。そのような時、ロングフェローによると、彼は一時難破する。（しかし、より真実には彼は徹底的に守られており、患難と同時に深い救いの原理が与えられている。しかも、最後の運命の勝利はメシアにあって生きてる彼にある。それは死後天上にて、判明するであろう。）「難破」という言葉はこのような意味を持つ。過去の偉人もかような意味で難破してきたのである。逆に、「難破」の別の意味はその人がまことの偉人であること（天上での聖徒の意味）の反証である。この反証こそ、彼の偉大性を示す。聖パウロは言う、“We are troubled on every side, yet not distressed; we are perplexed, but not in despair” (II Cor. 4:8)。最終的にはイエズス、メシアの十字架が完全に、それを証明する。かかる者は既に生まれる前から、永遠の神によって、特に愛され、救いに定められているのである。

ロングフェローの思想に背景には、やはり、聖パウロの存在を見逃すことはできない。すなわち、彼は次のように、述べている、“Always bearing about in the body the dying of the Lord Jesus, that the life also of Jesus might be made manifest in our body” (II Cor. 4:10)。パウロのには、神の御子の特別な啓示があった。それを彼は「宝」(“the treasure”)と呼んでいる：“we have this treasure in earthen vessels, that the excellency of the power may be of God, and not of us” (II Cor. 4:7)。彼を生かす力は人から出たのではなく、神から出たのである。その力が現われるために、身に患難が及んでも、彼は決して絶望しない。それは、パウロの体はイエススの死を帯びていて、彼によって主の力が示されるためである。そのように、ロングフェローには神への信仰があった。これによって、神の力が現われんとするのであるから、彼は決して絶望しないのである。

K

Let us, then, be up and doing,  
 With a heart for any fate;  
 Still achieving, still pursuing,  
 Learn to labor and to wait.

(だから、起きて、事をなせ  
 どんな運命にも、勇気をもって  
 常に為し遂げ、常に追求しながら、  
 労をして、待つことを学べ。)

その力を神によって与えられているのだから、いかなる運命にも負けることがない。ただ、神の力が満ちるところ、前進あるのみ。怠惰に伏して、事を怠けることは出来ない。歴史の流れの中であって、時流に流されるのではなく、神の道にあって、生きていくのである。常に、

仕事をなしつつ、常に、追求して労を惜しまず、そして、果実が現れるのを待て、と自らに諭しているのである。

ロングフェローはこの時、天からの聖霊を賜物として授かっていたのである。静かに、この喜びの御魂は彼を励まし、彼を心の底からこの世から解放させ、喜びで満たしたのである。

### 3. 「刈り手と花」 (“The Reaper and the Flowers”)

〔作詩経緯〕1838年12月6日の日記の中で、ロングフェロー氏は書いている。「美しい聖らかな朝が私の内側に。なぜか私は静かに、興奮した。そして、私の心の中で平和のうちに書いた。目には、涙が。それは、*The Reaper and the Flowers, Psalm of Death* であった。私は長い間、この種の考えを計画していたが、それを言葉で表現することがなかった。今朝、それは突然、結晶するように、思えた。私自身の努力も何もしないで。」この讃歌は1839年1月の *Knickerbockers* に印刷された。その副題は「死の讃歌」(*A Psalm of Death*) であった。それには、Henry Vaughan の親しまれている一連が付されていた。それは、

親愛な美しい、死よ、正義の真珠よ！  
で始まっている。

Vaughan は死を「義者」の宝石としている。これは死を讃美しているのである。しかし、聖書では、信仰者にとって死は次のようなものであったはずである、もし、彼がキリスト教徒であったならば：

And when the perishable puts on the imperishable, and the mortal puts on immortality, then shall come to pass the saying that is written:

“Death is swallowed up in victory.”

“O death, where is thy victory?

O Death, where is thy sting?” (I Cor. 15 : 54-55)

しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」とされるようにみことばが実現します。「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」(コリント I, 15 : 54-55)

とあるように、詩人は決して、死そのものを讃美していない。しかし、彼にとって、死は願わしいものであったであろう。死すらも神は人間に賜物として下さったのであるから。もし、死というものがなければ、いつまでも、永遠の国、霊的世界、天的世界に行くことは出来ないのであるから。死はその意味でこの現世から、愛する霊的世界、天的世界に趣くことを可能にする。誰がいつまでもこの不完全な、醜悪な、権力と自我意識過剰の世界におりたいだろうか。少なくとも、筆者は理想の国、イエスのおられる国、あの美しい、喜びの国へ生きたいと切に願う。

## 文学部論集

繰り返すが、聖書では死そのものが尊いのではない。むしろ、それを克服することが大切であると言われている。神にはそれだけに死の力を越えて、新しい命を付するエネルギーがあるのだから。しかし、そのためには人間がそれに相応しい実を結んでいることが必要である。人はその心のあるところがその人の生きつく究極の場になるからである。人はそのように造られていると言ってよい。換言すれば、人間の心のありかた、人間の生涯がどんなに、大きな責任があるかを示している。心の底から、真の信仰、神への愛を持つべきである。天に上げられるとは、アベルの捧げ物のように、ただちに天の火で焼かれること、彼に受け入れられることである。それには神の御旨にかなった心を持つ魂になることが必要である。そうでなければ、カインの捧げ物のようになるであろう。

さて、第一連をみよう。

### I

THERE is a Reaper, whose name is Death!

And, with his sickle keen,

He reaps the beared grain at a breath,

And the flowers that grow between.

(その名が死である刈り手がいる。

その鋭い鎌で、

彼は一息に髭のついた穀物を刈る、

その間に咲く花も一緒に。)

ここで、ロングフェローが歌っている中心は、老人に混じって、幼児が死ぬということである。これが、彼の非常に大きな心の痛手となっている。この詩は、この矛盾を解決せんとするロングフェローの努力の現れである。“Flowers that grow between”は幼児の象徴である。

### II

“Shall I have naught that is fair?” said he;

“Have naught but the bearded grain?

Though the breath of these flowers is sweet to me,

I will give them all back again.”

(美しいものは何も持てないのだろうか、と彼は言う、

「髭のある穀類しか持てないのだろうか？

これらの花の息は私にとって甘美であるが、

私はそれを再び戻そう)。

「彼」とは「死」つまり「収穫するもの」である。死は、その刈り取った花の匂いが馨しい

ので、それを収穫せずに自然に戻したい気持ちになっている。彼は、始めから花を刈るつもりはなかった。幼児の死は望ましいものではない。偶然に生じたものであるに過ぎない。

Ⅲ

He gazed at the flowers with tearful eyes,

He kissed their drooping leaves;

It was for the Lord of Paradise

He bound them in his sheaves.

(涙して、彼は花を見詰める。

その萎んでいく葉に触れる。

それは天国の主のためであった。

彼は花を束ねた。)

彼は不本意に刈り取った花を悼んでいる。そして、萎んでいく花を束ねて主に捧げる。

Ⅳ

“My Lord has need of these flowerets gay,”

“The Reaper said, and smiled;

“Dear tokens of the earth are they,

Where He was once a child.

(「わが主がこの明るい花が必要なのです

「刈り手はそう述べて、微笑んだ。

主がかつて子供時代を過ごされた、

この大地の大切なしるしです。)

この詩の意味は次の通りである。天にいる主がこの花を必要としている。そのために、花は死ななければならない。そうでなければ、主のいる天まで行くことはできないからである。花を束ねたのは、儀式としての行為であろう。花は枯れると同時に天に行く（文学的表現を用いる）。何故、花が必要であるかと言えば、イエスがかつて子供時代を過ごした地上の親愛なる印が花であるからであった。イエスは特別に花を愛された。

Ⅴ

“They shall all bloom in fields of light,

Transplanted by my care,

And saints, upon their garments white,

These sacred blossoms wear.”

(それらは、皆光の原に咲くだろう  
私の世話によって、移し変えられて  
聖徒らは、彼らの白い衣裳に  
これらの聖い花が飾りつける。)

花は光の原に咲く。花はもちろん、比喩であって、幼児の魂のことであろう。その幼児らは、天上の聖徒らの衣裳の飾りとなる。

VI

And the mother gave, in tears and pain,  
The flowers she most did love;  
She knew she should find them all again  
In the fields of light above.

(そして、母親は、涙と苦痛とで  
彼女が最も愛した花を捧げる。  
彼女はそれらを再び  
天上の光の野原で見出すことを知っていた。)

愛する子供達を天に送り、心を痛める母親は、天の光満ちる野原で彼らに再び会えることを知って、深い慰めと心の平和を得ていた。何という強い心であろうか。何という厳粛な思いであろうか。生半可の知識でこのことが分かるのではない。涙の体験を通して知るのである。また、人間の魂の持つ気高さがここにある。

VII

Oh, not in cruelty, not in wrath,  
The Reaper came that day;  
'T was an angel visited the green earth,  
And took the flowers away.

(ああ、あの日、「刈り手」がやってきたのは  
残虐さでもなく、怒りのなかでもなかった  
天使が緑の大地を訪ずれて  
花を取り去ったのである。)

幼児は死ぬと、すべて天に行くのである。彼らは天の使いと話をしているとイエスは言われた。これをスエーデンボルグは詳しく解釈している。子供の魂は汚れておらず、天国に行くことができる。これら天使の源は地上の幼児である。イエスは幼児の魂を愛された。花を愛されたように。死んだ幼児の魂を主は受け入れて下さり、天上で美しく天使とされる。この最

後に来て、刈り手の意味が全く変化している。彼は幼児を天使とするその天の使いであったのだ。

#### 4. 「星の光」 (“The Light of Stars”)

「この詩は美しい夏の夜に書かれた。月は、銀の小さい筋であった。オーバンの山の小森の後に沈もうとしていた。そして、南東に金星が輝いていた。空は奇妙な光があった」。この詩は『ニッカーボッカー』に、最後として発表され、人目を引く。A *Second Psalm of Life* と題され、Vaughn の同じ詩の別の連から引用されていた。

It glows and glitters in my cloudy breast,  
Like stars upon some gloomy grove,  
Or those faint beams in which this hill is drest  
After the sun's remove.

(私の曇りの胸の中で、燃えて輝く  
晴れの森の上の星のように  
又は、太陽の沈んだ後に、この丘が  
現わすかすかな光線のように。)

暗い夜に輝く星に興味を持っている。何故であろうか。詩人は何故、夜の雰囲気詩作しているのだろうか。朝日の輝きと共に祈り、希望を持つ。というのが、Thomas Kenn の讚美歌であった。これならば、分かる。しかし、夜の星の光に殊更、希望を託すると言う詩人は、恐らく、彼の住んでいた町の夕べの景色が非常に感動的に美しかったのであろうか。イエスの生誕の際に、星を頼りにした東方の博士たちの心境に似ていると思われる。ヴォーンの詩において、光は霊的な光である。パウロは次のように言う：

For it is the God who said, “Let Light shine out of darkness,” who has shone in our hearts to give the light of knowledge of the glory of God in the face of Christ (II Cor. 4:6).

この暗闇よりの光、これが詩の原型になっているように思われる。

#### I

THE night is come, but not too soon;  
And sinking silently,  
All silently, the little moon  
Drops down behind the sky.

(夜がやってきた、しかし、ほど良い頃に  
そして、静かに沈み行く、

文学部論集

なべて静かに、小さい月が  
空の後方に沈んで行く。)

夜の月の動きが鮮明に描かれている。輝いていた月が静かに、沈んでいく。その美しさと自然の荘厳さに心を打たれたのであろう。詩人の心は何と内面に平和を得ていることだろうか。水晶のように澄んだ詩人の心がひしひしと伝達される。

II

There is no light in earth or heaven  
But the cold light of stars;  
And the first watch of night is given  
To the red planet Mars.

(天にも地にも光はない  
星の寒寒とした光を除いて;  
夜の最初の更が  
赤い惑星に与えられる。)

「夜の最初の更」とは、月が沈んでまもない頃のこと。この頃になると火星は一際、赤く輝く。他の星は寒寒として、輝いているのに。寒寒とした中の一つだけ赤く輝いている。

III

Is the tender star of love?  
The star of love and dreams?  
Oh no! from that blue tent above  
A hero's armor gleams.

(あれは、愛の優しい星なのか  
愛と夢の星なのか。  
いや、違う、あの上の青いテントから  
英雄の武器が輝いている。)

金星は愛の星ではない。戦の星である。武器の輝きが金星である。“that blue tent above”は夜の空がそのように見えたのであろう。輝いている星は戦っているから、赤いのであった。悪と戦い、サタンと戦う、神と共に生きるクリスチャンの姿が投影される。熱はそこから発散される。暗黒の世界に光と熱を発散するのは、戦っているクリスチャンなのである。ぬるま湯に浸る墮落した人間ではない。甘い夢を見るロマンティストではない。現実の最中において、それでも、神の国を打ち建てようとするクリスチャンなのである。彼らこそ、夢と希望の源である。

Ⅳ

And earnest thoughts within me rise,  
When I behold afar,  
Suspended in the evening skies,  
The shield of that red star.

(真面目な思いが我に生じる  
遠くの方から見る時  
夕べの空にかかる  
あの赤い星の優勝楯を見る時。)

夜の星、その中に赤い星、火星を英雄と考えている。その赤い星に対して、なぜ、「真面目な思い」が生じてくるのであろうか。それは“the shield”「優勝楯」にある。「優勝楯」は勿論、勝利した者にのみ与えられる。この勝利への予感が詩人の心を刺戟する。暗黒の勢力の中で、その勢力に染まらず、否、神の栄光を静かに現わすことが勝利であらう。夜空に、ただ一つ赤く燃えている星は詩人に確かに真理への情熱を燃えたたせたとに違いない。それでは、その星は詩人にどのような影響を与えたのだろうか。

Ⅴ

O star of strength! I see thee stand  
And smile upon my pain;  
Thou beckonest with thy mailed hand,  
And I am strong again.

(オウ、力の星よ、汝は立ちて  
我が苦痛に微笑みかけている。  
汝はその鎖かたびらを着た手で我を指し招く  
すると、我は再び強くなる。)

詩人は火星を「力の星」(“the star of strength”)と呼んでいる。その力の星が彼の苦痛を見て、微笑む。その星は詩人の苦痛を知っている。「幸いなるかな！」で始まる山上の垂訓にあるように、苦しんでいる者に対して、イエス・キリストの満ち溢れる同情の心が押し測られる。その手招きを受けた時、彼は強くなった。この星はキリスト・イエスの象徴であると考えてよい。その力を見る時、自分の心にも力が湧き起ってくるのを感じたのである。力の源泉なるキリスト・イエスによって力を受けたのである。キリストは真に勝利者であった。彼を信じる者も勝利者である。

Ⅵ

Within my breast there is no light  
But the cold light of stars;  
I give the first watch of the night  
To the red Planet of Mars.

(心の内に、光なく  
星の冷たい光のみ  
あの赤い惑星、火星に  
初更の一時を与えた。)

自分の心には光はない。“Within my breast there is no light.” 肉眼の視力を失ったミルトンにも同主旨のソネットがある。ミルトンには肉眼に代る、霊の目があった。天上の光を知覚する霊があった。(もちろん、霊的光と自然の光は異なる(スエーデンボルグ)。しかし、ロングフェローに欠けているのは、この「霊の光」であるが故に、その苦しみと寂しさに限らない。肉体を持っていながら、生命がない、というのは、実に苦しいことに違いない。

今あるのは、寒寒とした理性の光であった。又、肉眼の目でしかなかった。悲しい気持で主を仰いでいる。その悲しい心で火星を見つめていると、それがまるで、イエスのように、力の溢れた救い主のように思われてきた。

この6連は、2連に直接繋がる思想である。ここで、詩人の心はもう一度、冷静になり、第3-5連の経過を繰り返す。それが、第7-9連である。同じような、思想の流れの繰り返しである。決して矛盾したことを言っていない。詩人に特徴的な繰り返しの効果を狙ったものである。

VII

The star of the unconquered will,  
He rises in my breast,  
Serene, and resolute, and still  
And calm, and self-possessed.

(無敵の意志を持つ星、  
私の胸の中に生じてくる  
穏やかで、心強く、静まり  
冷静で、落ち着いている。)

森羅万象は何を語るか。特に今、心は寒寒として、荒涼にして、光のない、苦しい状態にあって、詩人はこの赤く灯っている火星に何の慰めと希望を見出しているのか。外界の、この星を見つめていると、知らず知らずのうちに、驚くかな！ 無敵の力が生じてきた。それは詩人の心は金剛石のように堅く、水晶のように冷静である。

VIII

And thou, too, whosoever thou art,  
That readest this brief psalm,  
As one by one thy hopes departs,  
Be resolute and calm.

(そして、汝も又、汝が誰であろうと、  
この短い讃歌を読むものは  
汝の希望が一つ一つ消えて行く時に  
心固くして、穏やかなれ。)

この詩が書かれた詩人の環境が何であろうと、この詩にはまことに、魂の泉から込み上げてくる喜び、真理の力がある。特に、読者の胸を打つのは「人生の希望が、それも妻、子供、社会の活動など、まことに、身近で深刻なものが一つ一つ去っていく所である。少し前は、希望と喜びに満ちた人生、幸福で何一つ欠けたものがなかった。家庭、家族、社会、財産、名声、すべて、満月のように脹らんでいた。しかし、何かの変化で、それがまるで手足をひきちぎられていくように、消えていく。この時の詩人の気持は恐らく、自分でも空しい存在で、裸で生れたのだから、裸で帰っていく。この世に望みを繋ぐのではなく、天国に希望を置くことを痛切に悟ったことであろう。しかし、そのような時にも、勇気をもって、心固く、穏やかなれ、と教える。それは、まさに彼自身の体験であった。それ故に、それが、最善の道で、道理にかなう。

IX

Oh, fear not in a world like this,  
And thou shalt know ere long,  
Know how sublime a thing it is  
To suffer and be strong.

(オッ、このような世の中でも、恐れるな  
汝はまもなく知るだろう  
苦しんで、それでいて強くなることは  
如何に、崇高なことであるか。)

個人的な水準の希望ではなく、世の中の墮落、悪などを思うにつけ、又、自己の社会の仕事がいかに無力であるかを思い知るときがある。このような時、恐れるな。彼は既に世に勝っているのだ。キリストス・イエスが我われの先輩として、この世に勝ち給うた。いかに、今、惨めな、傲慢な世が動いていても、恐れてはならない。真の希望の光はキリストス・イエスにあり、彼は久遠の光、勝利の魂、愛の光、罪の許しである。時流に乗り、権勢を得る、小生意

## 文学部論集

気に、小賢しく、振る舞っている者こそ、敗北者である。彼の魂は真理に対して死んでいる。彼はもう既に、滅ぶべきサタンの勢力にあり、まもなく滅んでいく。だから、彼らの声が喧しく響いてきて、我らを圧しようとも、それでも恐れてはならない。 Kristusこそ、真の希望の星、救いの源泉である。ここに、感じられるのは一種の諦観 *enunciation*, *Entsagung* である。神の国にあるものが、この世の勢力に対して持つ一種の諦めの心境である。ワーズワースも（ゲーテも）このような心境に到達したと言われている（Wordsworth, *The White Doe of Rylstone* (1815) に出ている）。

## あとがき

以上の四つの詩篇のどの部分を選んでも、彼の信仰が溢れていないものはない。彼の詩は信仰の表出であった。即ち、我々は「夜の讃歌」において、夜の静けさの中での天国への想念が、「人生の讃歌」において倦まず、怠ることなく、霊に燃え、主に仕える決意が、「刈り手と花」において幼児の死は主イエスの地上の生活の善き思い出としての意味が、そして「星の光」に人間の真の価値はこの世にあるのではなくて、天国にあるという認識が歌われているのを見た。詩人ロングフェローは旧約時代の詩人のように、社会、自然、人事など、すべてにおいて人生の意味を絶えず説き続けている。彼は難しい理屈や教義を語らず、まして、それらを弄ぶようなことは全くなく、誠実に、まっすぐに表現している。いわゆる文学の人ではなく、時には世の暗黒に反発し、時には夜静かに、天国を夢に描き、死の天上的生意義を考え、荘厳な自然の人間への語りかけに反応する。このような、ロングフェローは少なくとも筆者の模範である。

### 注

- (12) Works, p. 19.
- (13) 森谷『前掲書』50頁及び213頁を参照。
- (14) Works, p. 20.
- (15) 讚美歌75番を参照。
- (16) *Rabbi Ben Ezra*, VIIを参照。
- (17) E. Swedenborg, *The Divine Love*, p. 85 を参照。
- (18) マタイ伝, 16:26を参照。
- (19) Jacob Bronowski, *The Identity of Man* (Aikusha, 1976), p. 5 を参照。
- (20) Swedenborg, *Doctrine of the Sacred Scripture*, p. 71 を参照。
- (21) エレミア第4章23—24を参照。
- (22) ルカ伝12:19—21を参照。
- (23) ヨハネの黙示録2:17を参照。
- (24)(25) 出典については次回に付す。